

史 談

2026 (R8) 1.13

■新年のごあいさつ

皆様、明けましておめでとうございます。

2026年がスタートしました。昨年カメムシが大量に出たので降雪量も多いと予測していましたが、今のところ外れています。熊もようやく冬眠し、県内外の人的被害のニュースも少なくなつて穏やかな年末年始になりました。

今年は史談会発足から70年になります。丙午年ですし、元気に駆け回っていきましょう。

■令和7年度史談会研修会を開催します

令和8年2月14日(土)、下記のように研修会を開催します。

記

期 日 令和7年2月14日(土)
場 所 十王地区コミュニティセンター
時 間 午後1時30分から3時15分
内 容

「宇宙の歴史－佐藤文隆先生を偲んで－」

加藤晃一さん

「天蚕飼いの仕事」 守谷英一さん

懇親会

参加費 会員：無料 会員外：500円

*懇親会は別費用になります

昨年9月、宇宙論の第一人者であり、名誉町民の佐藤文隆氏がお亡くなりになりました。

佐藤氏は町立図書館に多くの本を寄贈され、館内の郷土資料のコーナーに「佐藤文隆文庫」が設置されました。また、子どもを対象にした宇宙物理関係について学習する「佐藤文隆記念白鷹宇宙探検隊」が結成されています。

この宇宙探検隊に講師として関わる加藤さんより、佐藤氏を偲んで宇宙に関する発表があります。

また、深山の圃場で飼育する緑色の糸を吐く蚕、「天蚕(ヤマムユガ)」について、天産の会の副会長を務める守谷さんの発表があります。

昭和63(1988)年から、深山地区で天蚕の飼育が行われていて、守谷さんは平成27(2015)年から天蚕の飼育作業に参加しています。

ご参加の方は2月6日(金)までに教育委員会へご連絡ください。☎ 85 - 6146

■畔藤田植踊りを3D映像化しようとして

大内紀子

田植踊りとは、主に宮城・岩手県などの東北地方に固有の民俗芸能で、新春にその年の豊作を予祝するため、田の耕作から刈り上げまでの労働を舞として演じる芸能です。山形県では約36の団体が田植え踊りを実施しているとの調査があり(2016年、菊池和博氏による)、置賜では畔藤田植踊りのみが存続しています。

畔藤田植踊りは、吉野村小滝(現南陽市)から婿にきた菅原惣七によって大正末頃に伝えられ、旧暦8月18日の雷神社の祭礼において毎年奉納されました。田植始めを慶ぶ演目「お正月」に始まり、全ての作業を終えて暇乞いする「あがりはか」まで8つの演目を演じます。中腰や蹲踞の姿勢をとり、高く飛び跳ねるなど力強い動作が多く、日々の労働に鍛えられた肉体あつての踊りです。



写真 雷神社での奉納舞 (2025.10.5)

畔藤田植踊り保存会は高齢化が進み、若い会員がいないことが問題になっています。そこで、踊りを 3D 映像（ポリュメトリックビデオ）で撮影して記録保存をするとともに、映像を県外へ出た若者の教材として配布し、自宅で練習、お祭りの時に地元へ帰ってきて踊ってもらうような流れを作ろうと保存会の皆さんと計画しました。撮影はつながりのあった株式会社ニコンさんに依頼し、資金を京都市の助成事業を活用しようとして申し込みしました。結果は次点で落選。残念です。



写真 田植踊り の 3D 映像

3D 映像の利点は上下左右から踊り手を見られるので、手の出し方など奥行きのある動きが確認しやすく、また複数人が立ち位置を変えながら踊る動作の確認に向いていると感じます。

東根小学校で田植踊りを練習している 5 年生に、以前試験的に撮影した 3D 映像（上記写真）を自主練習に使ってもらったところ、役立ったとのことでした。

今回、計画実行まで至りませんでした。保存会の皆さんが努力されたことをお伝えしたくて、会報に書いてみました。

田植踊りの雷神社での奉納舞は途絶えていましたが、2025 年から復活し、そこに初めて東根小学校 5、6 年生の有志が参加しました。小学生にも晴れ舞台ができたことに喜びつつ、地域で大切にされている芸能が続くようサポートを続けていきます。

■「一周回って先頭に」

守谷英一

ぼんやりとテレビを見ていたら、昨年 12 月にノーベル化学賞を受賞した京都大特別教授の

北川進さんがでていた。インタビューでノーベル賞を受賞する秘訣を聞かれていたが、その答えが心に刻まれた。

「ノーベル賞を取る秘訣なんかはありません。だれもノーベル賞を取ろうとして研究はしていません。好きなことをやっているだけです」ということを前置きにして、「最先端のことをやろうとしなくてもいいのです。研究は陸上競技のトラックを走っているようなものだから、最先端の人が 1 周速く走って追いついてくると同じグループになる。その時に色々話して吸収すればいいのです」と答えられた。

また、先日、神奈川大学日本常民文化研究所から『「機械と人」を通して民具のいまを捕らえる試み』という農業機械や汎用旋盤を取り上げる講座の案内をいただいた。「いよいよ農業機械などが「民具」になるのか」とその時は思った。しかし、先の北川先生の話をかみしめてみると、これは「一週遅れの先頭」のように思われてきた。これは、機械を見ることにより民具がわかるということだろう。

現在、「AI」という優れた人工知能の開発が進んでいる。条件を入れると優れた文章なども作ってくれるそうだ。若い人の中には、なんでも「AI」まかせで済ますことができるという人もいようだ。そういう世の荒波にもまれている私などは、何周も遅れた先頭にたった気分である。負け惜しみのように「人にしかできないことがある」といつてみるのだが、具体的に何とはいえないままで過ごしてきた。そこで北川先生のことばである。

「好きなことをやる」そして「少し使ってみる」そこから「人にしかできないことが見えてくる」そういうことなのかもしれないと考えた。

■おしらせ

町歴史民俗資料館 あゆみしるでは、「団扇でめぐる荒砥・鮎貝の商店」を展示しています。団扇に書かれた商店名から、昭和 56 年中頃以降の街のにぎわいが伺えます。昭和 56 年の住宅地図とともに楽しみください（チラシ同封）。

期間：3月22日（日）までの金・土・日曜日

観覧料：一般 200 円、中学生以下無料、団体 100 円